

実践報告 企画展における付箋紙を用いた科学コミュニケーションの事例

南部靖幸

1 はじめに

近年、科学的事象に関するコミュニケーションが推進されており、博物館においても来館者に対して展示内容を解説する一方向のコミュニケーションのみならず、対話型の双方向コミュニケーションを主体とした活動が盛んに行われている。その例の一つとして、最近博物館でよく見かけるのが付箋紙を用いたコミュニケーションである（例えば三島ほか；2011）。これは来館者に質問・感想・意見などを書いて貼り付けてもらい、後に学芸員がまとめて返事を貼り付けるというシンプルなものであるが、学芸員が常に会場に常駐していなくても来館者と交流を図れる点で画期的な手法である。また、博物館での来館者の学習活動が「見る」「知る」が主軸であることに対し、館職員に自ら話しかけるなどの抵抗なく、気軽に自らの疑問や意見を「発信する」立場になれることも、この手法の優れた点の一つである。

このようなことを踏まえ、熊本博物館では平成27年2月28日～平成27年4月5日の期間で開催した企画展「しってるカイ？くまもとの軟体動物化石展」の会場内にて、付箋紙を用いた質問コーナーを設け、質問～回答のプロセスを通じた来館者～学芸員間のコミュニケーションを試みた。なお、この企画展自体は平成26年度実施事業であるが、小中学校の春季長期休暇に合わせ、年度を跨いだ会期であったため、本号にて報告を行うものとする。

2 目的

来館者からの古生物や化石に関する疑問を募り、回答することで、企画展の学習効果を高め、付箋紙での交流を通して、来館者に展示物のみならず博物館で働く学芸員にも興味を持ってもらうことを目的とした。また、来館者にリピーターとなってもらうために、何度も博物館を訪れる楽しさを提供する仕組みの検討や、来館者が展示を見て感じた疑問点や展示の意図が伝わりにくい箇所を把握し、会期中に補足解説やフィードバックすることも視野に入れ、

この企画を実施した。

3 方法

来館者が自由に質問を記入できるよう、企画展会場である特別展示室の一角に筆記具、付箋紙、質問を貼り付けるための掲示板を設置し、質問コーナーとした。付箋紙は来館者からの質問と、学芸員からの回答を容易かつ直感的に識別できるよう、来館者からの質問用紙を黄色、地質担当学芸員からの回答用紙を水色、動物担当の学芸員からの回答用紙を桃色と、3色で色分けした。

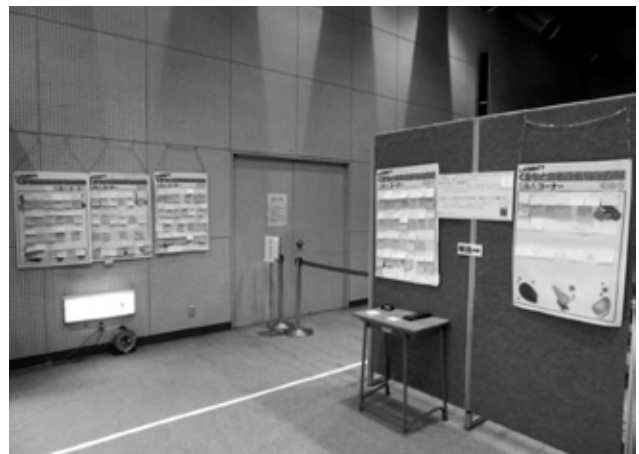


図1. 質問コーナー写真

また、熊本博物館は観光地である熊本城に近く、来館者には遠方からの観光客も多いため、自宅でも質問の回答を見られるように熊本博物館ホームページ内に特設ページを設け、寄せられた質問とそれに対する回答を定期的に更新した。ここで単なるWebを用いた質問回答コーナーとするのではなく、実際に博物館を訪れた人が一番得をするサービスを目指すため、あえて特設ページはトップページにリンクを表示せず、会場にて配布するURLを入力、もしくはQRコードから読み取ることでのみアクセスできる来館者のための“ひみつのページ”として位置づけ、来館した人だけが見られるという特別感を演出した。



図2. 特設ページ画面



図3. 配布したQRコード用紙

4 結果

会期中、質問は119件、感想は13件寄せられた。質問のうち、化石や古生物に関するものは75件、現在の動物に関するものは44件であった。

〈化石に関する主な質問と回答〉

Q：なぜかせきはぐるぐるが多いんですか？

A：まいたカラはまっすぐのカラよりコンパクトに成長できることが理由の一つかもしれません。

Q：岩から貝が見つかるのとふつうに貝が見つかるのはどこがちがうのですか？

A：砂や泥は長い時間がたつにつれ、水がぬけてかたまり、岩になっていきます。あたらしい化石はまわりの砂や泥がまだやわらかく、とりだせますが、古くなるほどまわりの砂や泥がかたくなって

とりだしくくなります。

Q：人間の化石はありますか？

A：あります。（※熊本博物館にはありません）数百万年前、最古の人類（猿人）がアフリカにあらわれて、その後の時代からもいくつもの種類の人類の化石がみつっていますが、今も生きているのはホモ・サピエンスだけです。

Q：クラゲは化石になるのでしょうか？

A：ごくごくまれにですがクラゲの化石が見つかることがあります。体そのものでなく、周囲の泥に“型”が残った印象化石というものです。

Q：きょうりゅうじだいでは、なぜいんせきがおちてきたのですか？

A：宇宙を飛びまわっていたいんせきが、ちきゅうのちかくをとおって、ちきゅうのひっぱる力にかまったためでしょう。大きないんせきは、すうおくねんに1かいくらいちきゅうにおちているようです。

〈現在の動物に関する主な質問と回答〉

Q：ネコザメはどうしてはがおっきいんですか？

A：まあるく、たいらでおっきな「は」で貝がらをつぶしわって、かいのなかみをたべるためです。

Q：たこはほねがないけど、いかはあるんですか？

A：スルメイカをさばいてみると、なかからプラスチックのような「ホネ」がでてきます。これは私たちの骨とちがって、アンモナイトやオウムガイのもっているような「カラ」が進化の中で体の中に入り、変化したものです。

Q：なんで魚は目がぱっくんこなんですか？

A：魚の目には、私たちとちがって“まぶた”がないので、目をつぶることができないのです。

〈感想〉

- ・あんなに目がなげめちやくちやおっきいのかわかってきましたよ
- ・石に貝がらのかたちがあったのがすごい
- ・大きい貝がらやめずらしい貝がら、かたつむりみたいな形の大きい貝がら、色がある貝がらいろいろあって勉強になったとおもう

- ・すごかったです。
- ・Q&A コーナーは大変良い試みだと思います。今後も続けていただきたいと思います。
- ・アンモナイトの化石は北海道からじゅんに大きいものから小さいのがありました。見せてくれてありがとうございます。いろいろな化石が見れてとても楽しかったです。貝のなかまがたくさんてんじてあってびっくりしました。
- ・化石は学校で勉強しましたが、本物を見るのははじめてでした。ありがとうございます。
- ・おうむがいがでかいです。
- ・アンモナイトはたことかいのいきもの
- ・もっといっぱいみたい
- ・ここのはくぶつかんはすごいですね。みなさんまたみにきてね。プラネタリウムみてね。

※質問や回答は原文のまま掲載

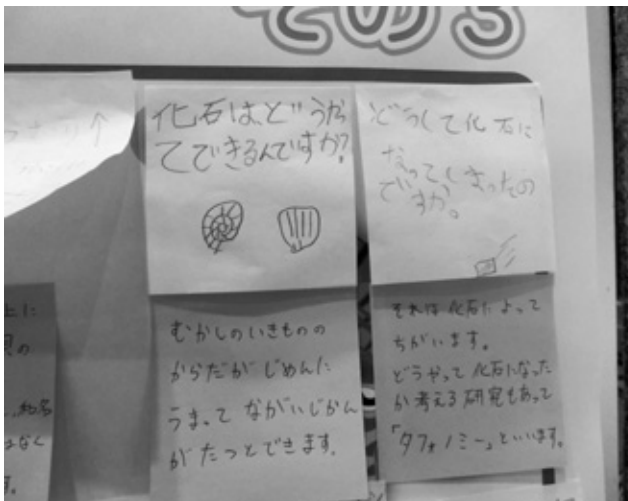


図4. 付箋紙に記入された質問

5 所感

今回の付箋紙を用いた手法では、記入内容のみならず、筆跡から読み取れる文字以外の要素から多くの情報を受け取ることができた。未就学児～小学校低学年と思われる筆跡での記入内容には、形や大きさ、色などの視覚的な情報に関する興味を示されたものが多かった。それに対し、小学生中学年以上の児童・生徒と思われる筆跡や漢字を使った記入内容には、視覚的な質問や感想に加えて、展示パネルの

内容に関する質問や、恐竜や動物など自身が持っている知識に関する質問が見られた。これらは実際に年齢を確認した直接的な情報ではないため、定量的な評価はできないが、今後展示を制作する際にメインターゲットとする年齢層の来館者の興味や理解を検討するための指標となるだろう。

また、貼り付け順において、直前に位置する付箋紙の質問内容の次に関連する質問内容が続くことが幾度もあった。例えば、「アンモナイトの殻はなぜうずまきなのですか？」という質問の後に、アンモナイトの殻の形に関する質問が続くケースや、「鳥はなぜ飛ぶのですか？」という質問の後に同じように動物に関する質問が続くケースである。筆跡により記入した人物が異なることが伺え、直前の質問から時間が空いた後にも質問が続くこともあり、記入者が同一人物や同行者（たとえば家族）でない他人の質問の影響を受けているように思われる。このことから質問を掲示するコミュニケーションでは、目的とした「学芸員－来館者」間のみならず、見ず知らずの人の質問内容を読んでから自分の質問を繰り出す「来館者－来館者」間のコミュニケーションが潜在的に行われていたことが示唆される。このようにして来館者が、他の人は同じ展示を見てどう感じているか触れることで、より多角的な視野に立った観察や理解につながることを期待できる。ただしこの状況をそのままにしておくと、「右に習え」式に付箋紙の質問内容に偏りが発生し、場合によっては本来の趣旨から大きく外れた質問ばかりが続く不都合が生じてしまうこともあった。そのため、会期の後半からは質問内容に偏りが生じ始めた場合、付箋紙の貼り付け順を再配置して、内容の偏りがある程度コントロールするように心がけた。

また、来館者からの質問により展示を構成する際に意図していなかった部分に来館者は興味を抱いていることが多いと気づかされることがあった。例えば、北海道のアンモナイトと熊本のアンモナイトを並べ、その変形の度合いの違いを示した展示において、寄せられた質問には変形の度合いよりも展示した標本の大きさの違いに関するものが多かった。このように展示内容から来館者がどのように感じ取っ

たか知ることができ、展示へのフィードバックを行うための情報として活用できる。

6 課題

今回の試みで最も時間を費やしたのは、特別展示室—学芸室間を往復し、記入内容をホームページの入力フォームに打ち込む作業であった。付箋紙を回収してしまうと、入力中に記入してくれた来館者が戻ってきた時に見られないため、初めのうちは閉館後に新しく増えた付箋紙をはがし、翌日の開館までに入力して戻す方法をとっていた。しかし会期が進み、春休みに入ると質問数が増え、この方法では対応しきれなくなってきたため、デジタルカメラで付箋紙を撮影して記録し、質問内容の入力を行った。三重県総合博物館では常設展示室において、付箋紙による質問板と共にデジタル端末が設置しており、キーボードに打ち込んだ内容が画面の付箋紙型のアイコンへ記録され、画面に多くのアイコンが表示されるシステムが導入されている。このような技術の普及によって、入力作業が不要になり、事務室からオンラインで回答できるなど、煩雑さは解消されていくだろう。しかし、所感で述べたとおり手書きの文字には文字情報以外の情報も多く含まれている。双方を取り入れられる上記の事例は理想的であるといえる。

今回の企画展会期は熊本博物館の常設展示室がリニューアル工事のために閉鎖しており、プラネタリウムや特別展示室などの一部のみ来館者を受け入れている状況であったため、来館者が少なく、特展室内に職員が目が届きやすい環境であった。それでもいたずら書きは数件確認された。リニューアルオープン後は来館者数が増加し、職員が目が届きにくくなることが予想される。そのような通常開館時に行うためには、定期的な巡回や回答手法、質問板の設置場所や設置期間など、技術面、運用面での改善が必要であるだろう。

7 おわりに

この企画展の会期終了後ではあったが、偶然筆者が閉館前に展示場にいた時に、付箋紙の質問板の回

答を見るために再来館した家族に出会うことができた。この出会いにより、僅かではあるがこの試みが実際にリピーターを生み出すきっかけになったことを確かめる事ができた。

もちろん質問板のみを目当てに多くの来館者に再び博物館に来てもらうことは難しいと思われる。しかし、「新しい企画展やプラネタリウムの新番組が始まったから、前に書いた質問がどうなっているかも合わせて見に行こう」といったように、他の要素と繋がって、来館者が再び博物館を訪れる魅力の1つとなり得る可能性は十分感じられた。今回は企画展の会期内のみの企画であったが、何らかの形でより効率的に継続できる仕組みを検討していきたい。

8 謝辞

この企画を行うにあたって、九州大学総合研究博物館の三島美佐子先生には事例写真をお送りいただき、実施にあたっての助言をいただいた。また、動物についての質問回答には当館の動物担当学芸員の清水稔氏に協力いただき、他の職員にも見回りや、回答内容への助言、例題の検討など、様々な協力をしていただいた。この企画にご協力いただいた全ての方に感謝いたします。

引用文献

三島美佐子・坂倉真衣・田中あかり・松隈明彦・岩永省三 (2011), 実践報告：九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ！—見よう・描こう・比べよう！—, 九州大学総合研究博物館研究報告, No. 9, 69-76, 2011